

子どもの伸びしろを広げるため 積極的なカリキュラム整備と 人的な連携・交流を

千葉大学 教育学部 教授 ^{まつざき}松崎洋子先生

まつざき・ようこ 臨床発達心理士。主な研究テーマは、保幼小接続、乳幼児期の運動発達と環境。国立教育政策研究所プロジェクト研究「幼小の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究」委員などを務める。近著に『よくわかる！教育・保育ハンドブック—幼保連携型認定こども園教育・保育要領に学ぶ 保育の質を上げる10のポイント』（フレーベル館・共著）、『幼児理解の理論と方法（乳幼児教育・保育シリーズ）』（光生館・共著）など。



園と小学校が育ちのビジョンを共有し、接続期を成長の機会に

「10の姿」を共通言語として 保幼小の意思疎通を深めていく

保幼小接続の必要性を問われたら、ほとんどの保育者が必要と答えるでしょう。私が10年前に接続の研究を始めた頃は、「わざわざ何かをする必要があるのか？」と聞き返されることが多かったことを考えると隔世の感があります。

では、既に十分な取り組みが見られるかという話は別です。保幼小接続には発展の過程の目安を示すステップがあり（図1）、さすがに「ステップ0」の園はあまり見られなくなりましたが、「ステップ3」「ステップ4」まで進んでいる園も多いわけではありませ

ん。子ども同士の交流から始めたものの、「あまり効果を感じない」「どう深めればよいかわからない」といった感想を抱く園も多いのではないのでしょうか。

保幼小接続の大切さは、今回の要領・指針の改訂（改定）にもよく表れています。改訂の大きなポイントは、幼児教育において育みたい資質・能力として、「知識・技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」が示されたことです。これら3つの資質・能力は小学校以降も育成されていきますから、幼児教育が学校教育の基礎として明確に位置づけられたといえるでしょう。小学校学習指導要領の総則にも、幼児教育をしっかりと踏まえて小学校教育につなげることの大切さが強調されています（図2）。

図1 連携から接続へと発展する過程のおおまかな目安（幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議報告書より）

- ステップ 0 連携の予定・計画がまだ無い。
- ステップ 1 連携・接続に着手したいが、まだ検討中である。
- ステップ 2 年数回の授業、行事、研究会などの交流があるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない。
- ステップ 3 授業、行事、研究会などの交流が充実し、接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている。
- ステップ 4 接続を見通して編成・実施された教育課程について、実施結果を踏まえ、更によりよいものとなるよう検討が行われている。

図2

小学校学習指導要領の 保幼小接続に関する記述

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること。

(平成29年告示 小学校学習指導要領「第1章 総則 第2 教育課程の編成 4. 学校段階等間の接続」より。太字は編集部による)

一方で、これまでは幼児教育と小学校教育の関係者の間で十分な意思疎通が図れていない状況がありました。園では5領域をもとに保育を実践してきましたが、それを通じた育ちが小学校にどのようなつながりが見えにくかったのです。そこで今回の改訂では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(以下、「10の姿」)という観点が導入されました。「10の姿」により、子ども一人ひとりの育ちを整理して捉え、いわば共通言語としてわかりやすく伝えることで、小学校に引き継ぎやすくすることをめざしているのです(図3)。

「10の姿」は、「育てるべき」ではなく「育ってほしい」と表現されているように、到達目標ではなく、あくまでも育ちの方向性を示したものです。5歳児の段階では、興味・関心等による個人差に開きがあるからです。

例えば、「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」では、「遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役

割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる」と書かれています。ここでいう「興味や関心、感覚」とは、子どもによっては「数字や文字がある」と気づくことでもよいですし、「読めるようになりたい」「使えるようになりたい」と感じる姿として表れるかもしれません。大事なのは、その時点での学びをもとに、子どもが次の成長への扉を開けられるようにしていくことです。保育者は、子どもの学びを無理に一定レベルまで引き上げようとする必要はなく、「10の姿」を方向性として捉え、小学校での成長にどうつながっていくかをイメージしながら、子どもが次の学びへと向かえるような援助をしていってほしいと思います。

接続期のカリキュラム整備で 保幼小接続の基盤を整える

5歳児クラスでは、「小学校で困らないように」といった援助が見られることがあります。しかし、幼児教育は「準備教育」ではありませんから、小学校の学習や生活への適応に過度に配慮することなく、時期ごとにふさわしい生活や活動を意識することが大切です。

幼児期の数か月は、大きく成長できる期間であるにもかかわらず、小学校の準備や卒園式の練習などに終始してしまうのはもったいない気がします。保育者主導ではなく、あくまでも子ども主体で、小学校進学に

図3

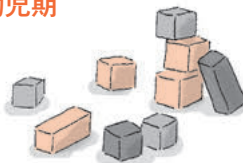
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(「10の姿」)

- 1 健康な心と体
- 2 自立心
- 3 協同性
- 4 道徳性・規範意識の芽生え
- 5 社会生活との関わり
- 6 思考力の芽生え
- 7 自然との関わり・生命尊重
- 8 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
- 9 言葉による伝え合い
- 10 豊かな感性と表現

幼児期の育ちや学びは小学校ではどのように伸びていくか

例えば、「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」の場合は……

幼児期



生活や遊びを通して数量などへの「興味や関心、感覚」が芽生える

小学校



興味や関心、感覚を出発点として、概念の理解を深め、しだいに活用できるようになる

向けてやりたいことを考え、カリキュラムや環境構成を検討しましょう。

これからは、園側が「アプローチカリキュラム」、小学校側が「スタートカリキュラム」を準備し、システムとして接続の基盤を整備することが求められます。「どうして改めてカリキュラムを作るのか」と、必要性を疑問視する方がいるかもしれません。ここには、前述の通り幼児期に育みたい資質・能力が要領・指針に位置づけられたため、カリキュラムとして明確化する意図があります。

さらに、その背景として、園・小学校の双方で、職員の世代交代が進み、経験の浅い職員が増えているという状況があります。これまでは5歳児や小学1年生といった接続期のクラスは、ベテラン職員が担任をすることでうまく対応しているケースが多く見られ、「こんな場合は、こう対応するとよい」といった、いわば暗黙知が蓄積されていました。しかし、そのような対応はだれにでもできるわけではないため、暗黙知をカリキュラムとして明確化し、どの職員でも一定の保育や教育ができるようにしようというわけです。

ただし、園の状況は、規模やその年の子どもの構成、興味・関心等によってもさまざまに変化します。その中で、園として普遍的に大切にしたいことを見いだして、アプローチカリキュラムに落とし込むとよいと思います。自治体によってはスタンダードのカリキュラムを作成しているところもあるので、それをうまく活用していきましょう。

連携ではねらい・目標の共有を 交流は負担なく継続的に

実際にカリキュラムを推進する際には、保育者と小学校教員の連携が不可欠です。

両者の連携でもっとも大切なのは、互いの保育や教育のねらい、目標を理解し合うことです。例えば、小学校教員が交流活動に参加した際に、園児がお店屋さんごっこをする姿を見るだけでは、「単に遊んでいるだけ」と捉えられかねません。逆もまたしかりで、小学校の授業の目標を理解せずに見学すれば、幼児期の援助との違いに違和感を抱くこともあるでしょう。交

流活動などの前に、短時間でもよいので互いのねらいや目標を伝えられると、活動の意図や子どもの姿をより深く読み取ることにつながります。

さらに、既に実践されている子ども同士の交流も、引き続き大切にしてほしいと思います。これまでは年に1回、園児が小学校に「お客さん」として招かれるなど、イベント的な意味合いが強く、準備の負担が大きいケースがよく見られましたが、もっと日常的な交流が増えるとよいでしょう。2回、3回と足を運ぶうちに園児の緊張はほぐれ、「ここを見たい」「こんなことをしたい」といった気持ちが出てくるものです。例えば、園児が小学校に「園だより」を持っていくという活動も考えられます。小学校の先生に丁寧な言葉を使って園だよりを直接手渡し、先生から「よく来たね。ありがとう」などと言われれば、それだけで達成感を伴う重要な経験になります。また、子ども同士が直接かわらなくても、園児が校内を歩き、校庭の広さに驚いたり、授業をのぞいたりするだけでも入学後の自分をイメージすることができます。

園からは複数の小学校に進学するため、1つの小学校と交流しても意味がないといった意見を聞くこともあります。しかし、園児にとっては小学校や小学生に触れ、自身の成長の見通しをもつことが大切であるため、実際に進学する小学校であるかどうかはあまり関係ありません。

要録で「伝えたい」「知りたい」ことの ミスマッチは少しの工夫でなくせる

保幼小接続の大切なポイントの1つとして、指導要録・保育要録（以下、要録）を通して子どもの育ちをいかに伝えるかについてもお話します。

一般的に保育者のみなさんは、「この子のことを理解してほしい」といった熱意のあまり、要録に内容を詰め込み過ぎる傾向があるようにも見受けられます。しかし、1人で数十人を担任する小学校教員にはそのすべてを受け止める余裕がなく、結果的に十分に活用されないケースもあるようです。しかし、保育者と小学校教員のどちらも、子どもの健やかな成長を一番に考えていますから、本来的に「伝えたいこと」と「知

りたいこと」に大きな違いはありません。保育者の側が伝える内容や伝え方を少し工夫するだけで、活用されないミスマッチを防げる場合があります。

小学校教員へのアンケートでは、要録を読むタイミングは3回ほどあることがわかりました。1回目は要録が送られてきたとき、2回目はクラスが決まったとき、そして、3回目はゴールデンウィークの前後です。注目したいのは3回目で、入学から1か月ほど経ち、気になる姿が見られた子どもについて、園での様子を確認したり、指導に生かせる情報を探したりするために、要録を読み返すのです。

要録には子どもの長所や得意なことだけでなく、小学校に申し送りしておいた方がよいと思われる点も記すと思いますが、ネガティブな内容に終始せずに園での援助方法などを書き加えると、まさに小学校教員には「知りたいこと」となります。例えば、「友だちとの話し合いに積極的に入れない」で終わらせることなく、「1対1で話をする状況をつくると言葉が出てくる」といった具体的な手立てを加えると、小学校での指導に生かしやすくなります。そして、要録は、小学校の先生と情報交換するためのツールと考えましょう。すべてを盛り込まなくても、それを媒介にしてやり取りできるような内容を書くように心がけると、互いにとって意味のある要録になるはずです。



ス集団に接する小学校教員は、個々の子どもの内面の読み取りよりも、言葉や文章などで表出されたことの見取りが多くなります。そのため、5歳児になったら、保育者は子どもの思いを先回りして言葉にせず、子ども自身や子ども同士による言語化を支援しましょう。

2つめは、共感的なかわりです。1つめの考え方に通じますが、子どもが困っている場面でも、すぐに介入せず自力解決できるよう支えることで、小学校以降も自分で問題に向き合おうとする力につながります。子どもが試行錯誤しているときに、保育者が「頑張る姿を見ているよ、知っているよ」と、共感する姿勢を見せることで、子どもは安心しますし、自己肯定感も高まります。そして、それが次の意欲へとつながっていきます。

3つめは、環境構成と教材を改めて見直すことです。5歳児ともなると園環境をよく理解し、できる遊びを熟知しています。だからといって子どもに任せきりにせず、どのような環境や教材を用意するといっそう夢中になれるかを、検討してください。その体験は、小学校で課題に集中する力につながるでしょう。

小学校では学習や活動は時間で区切られ、どれだけ熱中していても、終わりの時間を迎えたらずめなくてはなりません。そんな「タイムリミット」に支配された生活は大人になっても続きます。一方で幼児期は、好きなことに好きなだけ熱中できる「ワークリミット」を中心に過ごせる貴重な時期です。興味のあることにのめり込む経験は、子どもにとって宝物になるに違いありません。それを支える接続期の援助が、子どもの伸びしろをますます広げていけると考えています。

5歳児後半の接続期に意識したい 3つの援助のあり方

最後に、接続期に特に意識したい3つの援助をお伝えします(図4)。

1つめは、子どもの言語化を助けることです。保育では「読み取り」という言葉が使われるのに対し、小学校では「見取り」が一般的です。1人で大きなクラ

図4 円滑な接続に向けて意識したい3つの援助

- | | | |
|-------------|---------------|-------------|
| 1 | 2 | 3 |
| 子どもの言語化を助ける | 共感的なかわりを大切にする | 環境構成と教材を見直す |

保幼小接続を進める先生方が語り合う 「つながる」先の可能性と課題

千葉市では2017年度より行政と公・民の保育現場、教育現場、学識経験者が連携して、幼児期の学びや育ちを小学校へとつなげる取り組みを進めています。2018年度に接続を意識した連携・交流を行った園の保育者と小学校の先生が、コーディネーターの砂上史子先生とともに保幼小接続について語り合いました。

小学校との交流の意義

小学校のイメージをもつことで 安心感や期待感を高める

砂上（コーディネーター） 2018年度、千葉市の保幼小接続の取り組みのモデル実施園として、アプローチカリキュラムの作成や近隣小学校との交流に取り組まれた3園の先生、そして、モデル実施園との連携・交流活動をされた公立小学校の先生に、それぞれのご経験をお話いただきます。まずは各園に、近隣小学校との交流について教えていただきましょう。

大場（私立保育園） 小学校との連携には以前から関心をもっていました。小学校側の担当の先生がわからず、高い垣根を感じていました。今回、千葉市からお話をいただき、近隣の複数の小規模園と一緒に小学校との交流を初めて行いました。内容は、校庭遊びを1回、校内見学を1回です。

大町（公立保育所） 7月に保育者が小学1年生の生活科の授業を見学し、小学校入学までにどんな力をつければよいか、そのために保育所でどんな経験を積み重ねておくよいか、1年生の担任や教務主任の先生とお話をしました。その後、秋から子どもたちが小学校の校庭訪問、おたより交換、校舎内探検などを行いました。

竹内（私立認定こども園） 保育者が連携先の小学校の先生と意見交換を行った後、子どもたちが校庭訪問や交流会を体験しました。体育倉庫にある道具で遊んだり、補助具を使って逆上がりに挑戦したりしました。そのとき対応してくださったのが、今日この座談会に出席されている篠田先生です。先生が子どもたちの質問に丁寧に答えてくださったおかげで、子どもたちも



千葉大学 教育学部 教授
砂上史子先生

すながみ・ふみこ 臨床心理士・臨床発達心理士。専門は保育学。文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会幼児教育部会委員、厚生労働省社会保障審議会保育専門委員会委員、内閣府幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂に関する検討会委員を務め、平成29年告示の幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂・改定にかかわる。著書・共著書に『子ども理解と援助』（ミネルヴァ書房）など。

小学校の先生に積極的にかかわろうとしていました。

篠田（小学校） 園児たちは、校庭の鉄棒で楽しそうに遊び、さらに「この部屋は何？」と体育倉庫に興味をもったので、中に案内して「好きなもので遊んでいいよ」と伝えました。小学校での生活をイメージしてもらうのはよいことですし、園児の楽しそうな様子を見ることができて、私もうれしかったです。

竹内 交流会の後、お世話になった1年生にお礼をしたいと子どもたちから声が上がったので、メッセージを書いて、小学校に渡しに行きました。小学校側の負担にならないよう、先生に渡したらすぐに帰る予定でしたが、篠田先生のご配慮で本園を卒業した1年生が出迎えてくれて、子どもたちから直接お礼を伝えることができました。帰る道すがら、子どもたちは「1年生が出てきてくれるとは思わなかった！」と大喜びで、小学校への親しみを深めている様子が印象的でした。

大場 初めて小学校を訪問したときは、校庭の広さや遊具の大きさに驚いて、最初はドキドキした様子でしたが、元気に走り回り、遊具で遊ぶうちにドキドキが



アストロキャンプ稲毛東保育園
(私立)／園長
大場美佐子先生



宮野木保育所(公立)／
総括主任保育士
大町礼子先生



認定こども園ひまわり幼稚園
(私立)／主幹教諭
竹内久美先生



千葉市立松ヶ丘小学校
教務主任
篠田浩太郎先生

千葉市・私立 認定こども園ひまわり幼稚園

園長 腰越早苗先生
所在地 千葉県千葉市中央区松ヶ丘町 611
園児数 117人(3～5歳)

千葉市・私立 アストロキャンプ稲毛東保育園

園長 大場美佐子先生
所在地 千葉県千葉市稲毛区稲毛東 4丁目 2-21
園児数 48人(0～5歳)

千葉市・公立 宮野木保育所

園長 堀江由佳先生
所在地 千葉県千葉市稲毛区園生町238-56
園児数 150人(0～5歳)

ワクワクに変わり、小学校ならではの環境に興味をもったようでした。例年だと、就学時健康診断の後、少し不安な様子を見せる子どももいるのですが、昨年度はそれはありませんでした。小学校で遊んだ経験が不安を軽減するきっかけの1つとなったのでしょうか。

篠田 園児にとって、小学校訪問や小学生との交流はとても意味があるもので、いろいろな機会を利用して、もっと気軽にかかわれるようにすることが大切なのだと実感しました。ただ、今回の交流では、本校以外の小学校に入学する園児が多くいたので、「本当は自分が入学する小学校と交流できればよいのだろうけれど」とも思いました。

竹内 本園は今年度、5歳児が37人に対して就学先が16校と多岐にわたり、松ヶ丘小学校に入学予定の子どもは少数です。それでも、小学校の環境や授業の様子を具体的に目の当たりにできたことで、小学校に対して安心感や明るい見通しをもつことができます。その意味では、交流先が入学先でなくても十分に意味はあると感じています。

篠田 園の先生にうかがいたいことがあります。園との交流に対する小学校側の意識は近年、確かに高まっていますし、子ども同士の交流の機会も増えています。園児にとってその場限りではない、よりよい交流にするために、園はどのような活動を望んでいますか？

竹内 園児と小学生との間に自然な会話が生まれるような時間があればいいですね。なかなか打ち解けられない子どもも、例えば園にはない小学校ならではの場所を小学生に案内してもらうと、小学生と話ができて、小学校生活へのイメージも深まりそうです。

大町 本園が交流した小学校では、子どもたちが小学生のお兄さん、お姉さんに質問する時間をつくってもらいました。園であらかじめ聞いてみたいことを話し合ったことで、意欲的に質問し、やり取りする姿が見られました。

砂上 小学生への質問項目を考えて交流に臨むことで、活動のめあてが明確になりますし、小学生との相互作用も生まれます。小学生から園児に質問したり、園での活動を披露したりするなど、いろいろな交流の形が考えられますから、そうした活動の事例を園や小学校で共有し、積み重ねていくことも重要です。

園と小学校とのギャップ

小学校で重視される「我慢する力」をどう捉え、育むか

砂上 では、実際に交流を図る中で、園の先生や子どもたちが感じた小学校との段差や、双方の意識の違いなどはありましたか。

大町 小学校の先生からは、入学してくる子どもの課題として、時間に対する意識が十分に育っていない、自分の困りごとを周囲に伝えることができない、身の回りの整理整頓がうまくできないといったケースがあることをうかがいました。園は分刻みの時間割りで生活するような場ではありませんが、自分なりに状況を判断して、活動を切り替えていく力など、小学校で必要となる力を見通した上で、園での援助を考えていくことが大切だと改めて感じました。

竹内 小学校の先生方と意見交換を行った際に、「やるべきことをしっかりやれる子、先生の話をきちんと聴ける子を送り出してもらえるとよい」という話をうかがいました。小学校の先生方の思いを聞き、私たちも「小学校に行って困らない子どもに育てたい」という思いが強くなりました。そして、保育者の中から「文字の学習や玉そろばんなど、小学校入学の準備になるような時間を増やしてはどうか」という声も上がりました。しかし、保育者がさらに話し合い、「子どもの発達の特性を踏まえて、園でこの時期にしかできないことを体験することが大切だ」という結論になったのです。「45分間じっと座っている子どもを育てるのではなく、自分で考えて、友だちと協力し合いながら積極的に課題を解決しようとする姿勢を育てたい」という言葉を保育者から聞いたときは、円滑な接続の意義を理解できた手応えを感じました。

大場 今やるべきことを行う力、活動を切り替えていく力は、単に時間の意識があるからできるのではなく、そもそもの土台として、1つの活動を十分に楽しみ、満足する経験が必要だと保育者は考えていますよね。子どもたちは「満足」を経験しているからこそ、先を見通したり他者を思いやったりして「我慢」ができるのですから。十分に遊び込んで満足する経験が、我慢したり、気持ちを切り替えたりする力につながっていることを、私たちは忘れてはいけないと考えています。

篠田 十分に楽しんだ経験があるからこそ、さまざまな局面で我慢ができるようになるというのは、とてもよく理解できますし、そうした力を小学校でも活動を通して育てていきます。それでも、今どうしても我慢しなければいけないという場面もあります。

砂上 「させられる我慢」が必要な場面も確かにあり



ますが、育みたいのは「自ら我慢する力」です。先生が話しているとき、おしゃべりをするとは叱られるから静かにするのではなく、先生の話の聴くと楽しいし、新しいことが学べておもしろいといった満足感や必要感を土台に、子ども自身が納得して我慢できるようになることが大切で、それは園でも小学校でも同じです。ただ、小学校は時間と空間でやるべきことが明確に区別されていることが多いので、「させられる我慢」が色濃く見えるわけです。発達段階を踏まえれば、園で行うべきは小学校の準備教育ではないことは明らかですが、一方で、小学校での生活を見通しながら、援助のあり方を一人ひとりの子どもに合わせて考えていくことも必要です。難しいことではありますが、年長クラスの担任のやりがいともいえるでしょう。

保幼小接続と「10の姿」

子どもの育ちを接続する共通言語 「10の姿」への理解を深める

砂上 小学校との接続を意識することで、園での保育にどのような変化が生まれましたか。モデル実施園からは「小学校生活への円滑な移行という面はもちろん、低年齢の子どもへの保育のあり方を見直す機会になった」という声も上がっています。

大場 本園では、小学校との交流をきっかけに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)は5歳児になって突然育つものではなく、低年齢児の段階から意識していくものだという認識を、保育者が強くもつようになりました。そこで、2歳児から5歳児まで月案に「10の姿」の視点を取り入れ、アプローチ期

を5歳児後半に限らず、もっと大きな視点で見えています。園全体で保育者が「10の姿」を意識することで、活動のバランスがよくなっていると感じています。

砂上 「10の姿」は要領・指針に盛り込まれているだけでなく、小学校学習指導要領においても、幼児期の学びを児童期の学びにつないでいくことの重要性が示されています。また、小学校に提出する要録も「10の姿」を踏まえて作成されます。篠田先生、小学校現場では「10の姿」への理解は進んでいますか。

篠田 私自身、園の先生方との交流の中で「10の姿」について理解を深めましたし、要録も、本校では新しいクラス編成前の1年生担任、本年度の1年生担任、校長、教頭、養護教諭、そして、教務主任の私が目を通してしています。ただ、「10の姿」を共通言語にして、園の先生方と語り合えるようになるには、私たちはもっと「10の姿」について学ぶ必要があります。

大町 「10の姿」に対する小学校の先生の理解は、もっと深まってほしいと私も思います。その手立てとしてどんなことができるか、園も小学校も一緒に考えていきたいですね。

砂上 「10の姿」を保幼小の間でどう生かすかは今後の課題です。小学校との交流の際、幼児だけでなく小学生についても、具体的な活動の姿とこれからの育ちの見通しを、「10の姿」と関連づけながら小学校教員と保育者とでざっくばらんに語り合うことで共通理解も進むのではないのでしょうか。

篠田 「10の姿」に対する小学校側の理解を深める方法としては、例えば研修の際に、スタートカリキュラムと一緒に「10の姿」を教員間で共有することも考えられます。


竹内 園の活動が小学校での学びにどのようにつながっていくのか、「10の姿」を踏まえて保護者にも積極的に伝えていきたいです。本園では、モデル実施園としての取り組みについて、園のウェブサイトや園だより、小学校の写真を掲示した紹介コーナーなどで保護者に周知しているので、それらを活用していきたいです。

砂上 小学校生活で「10の姿」はどのように発揮され、どのように育っていくのか、小学校の先生や保護者とともに、理解を深めていきたいですね。


コラム

「10の姿」は0歳児からつながっている

千葉県子ども未来局子ども未来部幼保支援課 **上田昌弘** 課長補佐



千葉県では、幼児教育と小学校教育の接続強化を図るため、「千葉県版アプローチカリキュラム」の普及に取り組んでいます。民間保育園、公立保育所、私立幼稚園から指定されたモデル実施園が、千葉大学の先生方のアドバイスを受けながら、5歳児後半の指導計画の見直しと実践を行い、取り組み内容を他園に公開するものです。アプローチカリキュラムの作成に取り組まれたモデル実施園のみなさんは、「10の姿」は5歳児後半からではなく0歳児からつながっていることに気づかれました。このように子どもの発達を大きな時間の流れで捉える視点は、今後、小学校におけるスタートカリキュラムにも必要かもしれません。小学校教育を担当する教育委員会、幼児教育を担当することも未来局がともに、「小学校に慣れる」という短期的なねらいを超えた、中長期的な連携も考えていきたいです。さらに、年度初めに各園や小学校の連携担当者を周知するなど、最初の垣根を取り払うサポートも、工夫していきたいと思っています。



「千葉県版アプローチカリキュラム」作成のポイント

https://www.city.chiba.jp/kodomomirai/kodomomirai/shien/chiba-city_ac_sakusei-tebiki01.html

で

接続期の子どもの発達を理解し、主体的に学びに向かう姿勢や態度を育てる

神戸大学大学院 人間発達環境学研究科 准教授 **北野幸子**先生

きたの・さちこ 広島国際大学、福岡教育大学を経て現職。専門分野は乳幼児教育学、保育学、保育領域の専門性。環太平洋乳幼児教育学会（PECERA）理事、日本保育学会理事、日本乳幼児教育学会理事などを歴任。主な共著書に『3・4・5歳児 子どもの姿ベースの指導計画』（フレーベル館・共著）、『育てたい子どもの姿とこれからの保育』（ぎょうせい・共著）、『幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿』（東洋館出版社・共著）など。



◎保幼小接続期の子どもの発達とそれを支える保育への疑問に、Q & A 形式で解説します。

Q 年長児から小学1年生の接続期の子どもには、どのような発達が見られるのでしょうか。

A セルフコントロールの力が高まり、概念理解も進みます。

園では子どもの興味・関心に応じて遊びや活動を支援する個別援助を大切にしますが、小学校では教科書による一斉指導が行われ、チャイムにより時間が区切られています。こうした教育内容・方法の違いは、子どもの発達の特性に合ったものです。

幼児期の特徴の1つが自己中心性の高さです。例えば、幼児期には自分にとって必然性や興味があることならば、没頭して遊んだり、集中して話を聴いたりすることができますが、そうでない場合はなかなかじっとしてられません。それが5歳頃から他者の気持ちを察し、セルフコントロール（自分の気持ちや行動を制御すること）をして関係性の中で学んでいく力が芽生え、1年生の頃から周囲とともに集団で行動したり学んだりできるようになっていきます。こうした成長があるため、小学校では個別支援中心ではなく、一斉指導中心の教育が可能となるのです。

この時期には概念理解や記憶の力もぐんぐん高まります。幼児期は直接的・具体的な体験を通して学ぶ場合が多いのですが、しだいに言葉を通して抽象的な概念から学べるが増えていきます。例えば、海外に行って海外のことを学ぶには、多大な時間と労力を費やさねばなりません。小学校中学年くらいになると、抽象概念理解の力が高まり、写真や映像、活字から、海外に行かずとも多くのことを学ぶようになります。

そうした実体験中心から抽象的に物事を考えられるようになるといった子どもの発達には、順序性があります。ただし、その発達的な特徴が見られる時期や期間は、個性や環境などによる個人差が大きいことには注意が必要です。その点への配慮が不足すると、接続の段差が高過ぎてつまずいたり、逆に過度の「子ども扱い」となって自尊心や向上心が低下したりすることになりかねません。教育制度は国全体の大きな枠組みとして意図的につくられたものですから、合わない子どもがいるのは当然です。一人ひとりの子どもに不利益が生じないように配慮するのは大人の責任です。

Q 小学校への接続に向けた援助を行う上で、注意すべきことを教えてください。

A 直前に対策を立てて応じるのではなく、経験の積み重ねが大切です。

以前、小学校の先生を対象として、入学までに園で子どもに身につけさせてほしいことを調査したところ、もっとも多かった回答は「聴く態度」でした。小学校では1人の先生が一斉に大勢の子どもを担当する場合がありますから、静かに話を聴いてもらえることがとても重要なのでしょう。

こうした要望を受け、入学直前の子どもに対して「先生が話している間はおしゃべりをしないで」と指導すればよいかというと、それは少し違うと思います。なぜなら、聴く態度は、自分がじっくり話を聴いてもらってうれしいと感じたり、だれかの話を聴いて楽しいと感じたり、友だちとたくさん言葉を交わし合ったりといった、肯定的な経験の蓄積を通じて徐々に培われるものだからです。そうした経験が不足している子どもに対し、「静かに話を聴きなさい」と叱っても、場所が変わって叱る人がいなくなれば、行儀よく話を聴く姿はなかなか見られないでしょう。

そのほかの力や態度についても同じことがいえます。例えば、主体的な遊びや活動を通して、考えたりわかったりする楽しさや喜びを十分に経験した子どもは、小学校の学習課題にも前向きに取り組むに違いありません。そういう子どもは自己肯定感が高く、わからないことをおそれず、どんどんチャレンジして成長していきます。逆に幼児期に「どうしてできないの?」「ほかの子は終わっているよ」などと、叱られたりせかされたりしてきた子どもは、学びとは単に自分の不足を補うだけの、つまらない活動と捉えてしまうかもしれません。

入学直前に慌てて対策を考えるのではなく、幼児期を通して、遊びによる学びを支え、失敗を怖がらずに前向きな気持ちで学びに向かう主体性を育てていきましょう。そこでつくられた正のスパイラルは、子どもの学びの原動力になります。そうした経験を積み重ねて、小学校以降の子どもの学びを支えてください。



Q 学びに向かう主体性を育てる保育で意識すべきことを教えてください。

A 「エマージェント・カリキュラム」の考え方を参考にして、活動を深めましょう。

子どもへの洞察と理解を深め、子どもの興味や疑問、憧れなどの内面の動きを読み取れないと、適切な環境構成や働きかけ、促しなどの援助にはつながりません。保育者は常に子どもの内面を読み取る努力を続けながら、子どもを見る目を磨くことを心がけましょう。また、活動のねらいの設定や環境構成に関しても、「昨年こうしていたから」「この時期にはこうだから」といった考えではなく、目の前にいるリアルな子どもの姿をベースに構想する必要があります。

小学校では、教えるべきコンテンツや順序が明確に決められており、あらかじめ作成されたカリキュラムに沿って学習を進めます。これは、たくさんの知識・技能を効率的に教えるのに適した方法です。

しかし、このやり方は幼児教育にはなじみません。幼児期の子どもは、自分が興味をもたないことには意欲的に取り組めないものです。それにもかかわらず、子どもの反応を無視し、保育者主導のカリキュラムに沿って進めても、遊びや活動は深まりません。

幼児教育には「エマージェント・カリキュラム」という考え方があります。「創発的カリキュラム」と訳されますが、これは子どもの主体性や興味などに応じて臨機応変に、子どもとの相互作用のもと、つくり上げていくカリキュラムのことです。子どもが予想とは異なる反応を見せたときも、保育者はそれを柔軟な態度で受け止め、環境を再構成して働きかけを変えていくことで、遊びや活動を深めていきます。

本来、幼児期の子どもは自己中心性が高く、気持ちに左右されやすく、自由に発想し、新奇性を好みますので、保育者の予想が外れても何ら恥じることはありません。「おお、そうきたか」と、その反応を楽しんでしましましょう。計画通りに展開しないことが保育の難しさではありますが、まさにその点にこの仕事の醍醐味があるとも感じます。



Q 子どもの発達を支える上で、家庭環境や生活習慣の違いをどう考えるとよいですか。

A 多様な環境に慣れ、豊かな経験をする機会と捉えましょう。

子どもが園で過ごす大きな利点は、多様な環境に触れられることにあります。家庭では食べたことのないものが給食で出てきたり、見慣れない植物を育てたり、自分とは興味がまったく異なる友だちができたことといったことです。そうした経験を通し、子どもの内面には多方面の知性が芽生えていきます。

家庭環境や生活習慣の差は小さくありませんが、そうした園での経験が、要領・指針にうたわれている「豊かな経験」の最低保障になると捉えましょう。その上で、多様で豊かな経験を保障することが一人ひとりの子どもの育ちを支え、小学校での学びにもつながっていくことを、保護者にも伝えていきましょう。

Q 接続期の子どもの保育について、保護者に伝える際のポイントはありますか。

A 遊びの大切さを「10の姿」を通して説明しましょう。

現場の保育者の先生方と話していると、保護者から先取り学習のような活動を求められることも多いという話をよく聞きます。その要因の1つは、遊びを通した育ちのメカニズムが保護者に適切に伝わっておらず、小学校入学が近づくにつれて「ただ遊んでいるだけでは困る」といった焦りが生じ、いたずらに「結果」を求めてしまう風潮があるのだと思います。

何かを学ぶ際、子どもには発達の過程に応じた適切な時期があり、それまでは遊びや活動を通して体験していくことが重要であること、必ずしも先取り学習が効果的とは限らないことはご存じの通りです。例えば、早い時期から無理に鉛筆を持たせると、筆圧が強すぎる持ち方が定着してしまうことがあります。また、スポーツでも、何かの種目に特化して学ぶのに適した時期は10歳以降だともいわれています。それまでは、遊びの中で運動する経験を通じ、体の多様な神経回路をつくり、気持ちと体の動きや感覚を統合していく方が大切なのです。「これをさせないと将来困るから」というのは大人本位の考えであり、あくまでも子どもの興味・関心に基づく「やりたい」「知りたい」といった思いの実現を支える保育を大切にしたいものです。

そうした保育を実践するためには、遊びの大切さについて保護者に理解してもらうことが欠かせません。その際に役立つのが、「10の姿」です。小学校の先生と子どもの育ちを共有するための「共通言語」として、今回新たに要領・指針に導入されましたが、一般的にわかりやすい表現が使われているため、保護者への説明にも活用できます。ドキュメンテーションなどを作成する際、「この活動で見られたこんな姿に『思考力の芽生え』を感じました」などと、「10の姿」をキーワードに用いて子どもの姿を説明しましょう。実際にそうした発信を行った園では、保護者から教育的な意図を理解したコメントが多くなり、「そういう育ちがあったから、家でこんなことをしたがつっていたのか」といった声も寄せられるようになったということです。

Q 最後に保育者のみなさんへのメッセージをお願いします。

A 保育の仕事の専門性と価値を、子どもたちのために発信しましょう。

保育者のみなさんは保護者などに子どもの育ちを説明する際、いかに一人ひとりの姿が素敵だったかを懸命に伝える一方で、その裏で自身がどれほど環境構成を工夫し、働きかけ、応援し、見守っているかをあまり詳しく伝えようとしないのではないのでしょうか。子どもの育ちのすばらしさに比べると、自分たちの努力はかすんでしまうからかもしれません。しかし、自分たちの仕事の大切さをアピールしない謙虚さや美徳かもしれません。そのために過小評価されてきた実態もあり、必ずしも子どものためにもなりません。

ですから、今後は保育の専門性について、きちんと言葉で説明することも必要だと考えます。小学校以降の教育とは異なる、人間形成の基礎となる乳幼児期の保育の専門性とその価値を、子どもたちのために、私も保育者のみなさんと一緒に社会に伝えていきたいと思っています。